

# 資料報告 下森鹿島遺跡出土の追加石器資料について

長澤 有史\*

\* 相模原市立博物館

## はじめに

下森鹿島遺跡は相模原市南区上鶴間字下森に位置する旧石器、縄文、古墳～平安時代の遺跡である。土地区画整理事業に伴い、発掘調査が実施された（麻生 1993、河合・坪田ほか 2020）。本稿では同遺跡第 I 文化層出土の石器について、資料報告を行う。

## 1. 下森鹿島遺跡の概要

下森鹿島遺跡は小田急町田駅の南西に位置し、直線距離で約 600m を測る。境川右岸の相模原面に立地し、標高は約 95 m を測り、境川との比高差は約 15.5 m である。遺跡の現況は住宅地および道路である。下森鹿島遺跡が含まれる境川流域には、橋本遺跡（金山・土井ほか 1984）、山王平遺跡（麻生・相原 2021）、古淵 B 遺跡（関塚・松井 1990、河本・川本ほか 2005）、中村遺跡（小出・伊藤ほか 1987）などが発掘調査されており、市内でも旧石器時代遺跡が集中する。なお中村遺跡から下流約 3km には旧石器時代の研究上著名な月見野遺跡群（大和市）が位置している。

下森鹿島遺跡が立地する相模原面は市域で最も早く離水した段丘面とされ、約 9 万年前に離水したものと考えられている（町田 2009）。橋本遺跡や古淵 B 遺跡では、市内で最も古い時期に遺跡が形成されたことが明らかになっており、相模野台地にみられる後期旧石器時代のはじまりが把握できる重要な土地でもある。

土地区画整理事業に先立ち、相模原市教育委員会社会教育課により昭和 60 年 2 月に A～D 地区を設定され分布調査が実施された。その後、試掘調査を昭和 62 年 6 月～10 月末まで行った。その結果、遺構・遺物が確認された A・B・C 地区が本調査の対象となった。発掘調査は神奈川県教育庁文化財保護課・相模原市教育委員会の指導の下、下森鹿島遺跡発掘調査団が発掘調査を担当し、本調査を昭和 63 年 2 月～平成元年 1 月、および追加調査を平成 2 年 6 月～8 月末まで実施した。

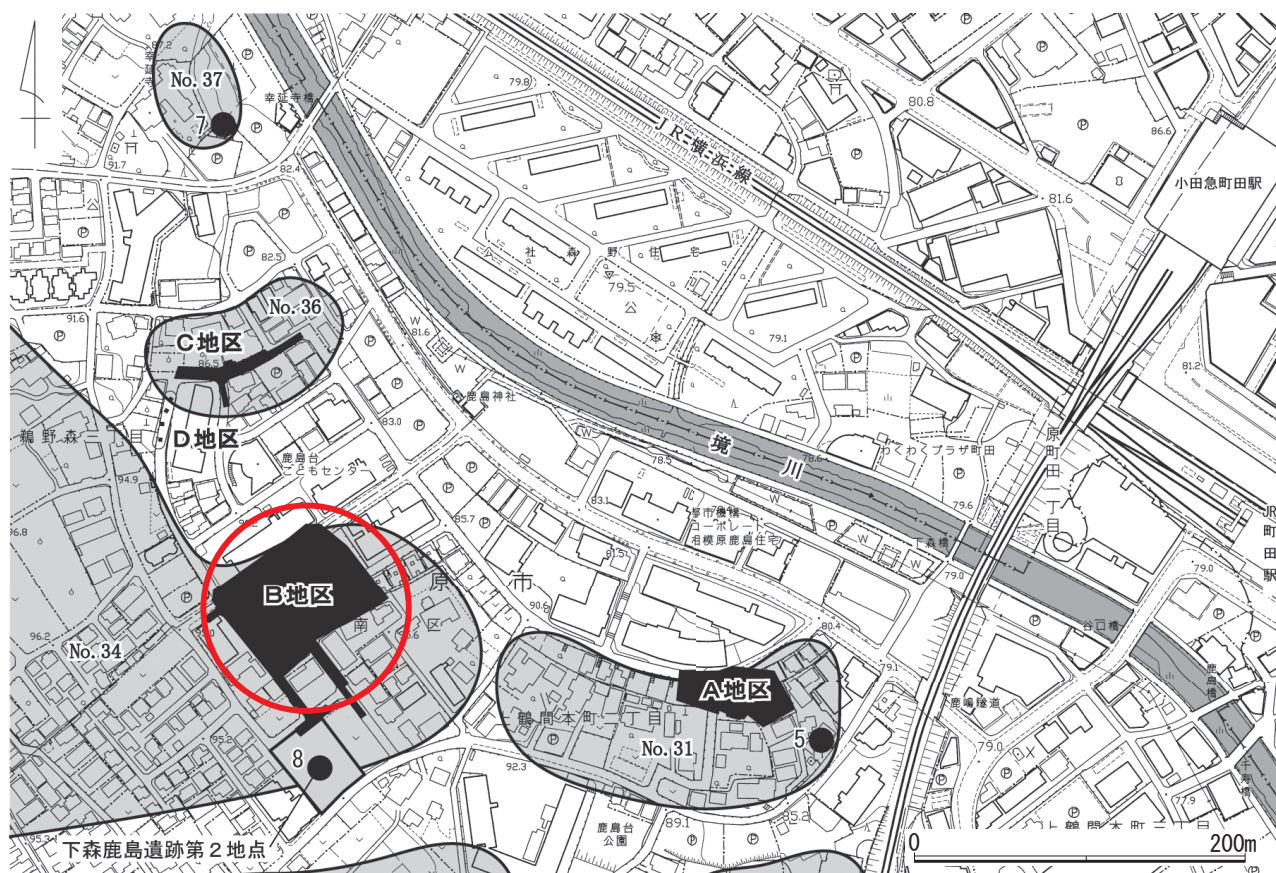
その結果、A 地区では縄文時代中期後半の竪穴住居址 2 軒、陥し穴 1 基、集石土坑 1 基、B 地区では奈良～平安時代の竪穴住居址 3 軒、土坑 2 基、縄文時代中

期後半の竪穴住居址 17 軒、柄鏡形敷石住居 1 軒、埋設土器 2 基、陥し穴 2 基、土坑 23 基、C 地区では古墳～平安時代の竪穴住居址 7 軒、平安時代と推測される掘立柱建物址 2 棟、土坑 11 基、ピット 21 基、中世と推定される集石 3 基をそれぞれ検出した。また、追加調査では縄文時代中期後半の加曽利 E 式期の竪穴住居址 1 軒が確認された。本遺跡の調査報告書は 2 冊刊行されている（麻生 1993、河合・坪田ほか 2020）。

旧石器時代の調査は B 地区にて行われ（第 1 図）、文化層は 3 枚確認された。第 I 文化層は L1S 層に生活面をもち、尖頭器を主体にした石器群であり、出土点数は合計 783 点を数える。その内訳は尖頭器 9 点、スクレイパー 48 点、クサビ形石器 5 点、二次加工痕のある剥片 50 点、使用痕のある剥片 25 点、剥片類 550 点、石核 66 点、敲石 12 点、台石 3 点、礫器 14 点、その他 1 点である。第 I 文化層の石器群は相模野第 V 期に位置づけられる。第 II 文化層は B1 層上部に生活面をもち、ナイフ形石器や尖頭器を主体とする石器群である。その内訳は、ナイフ形石器 59 点、尖頭器 46 点、スクレイパー 18 点、彫器 6 点、揉錐器 6 点、クサビ形石器 6 点、二次加工痕のある剥片 54 点、使用痕のある剥片 45 点、剥片類 478 点、石核 7 点、礫器 2 点、敲石 4 点の合計 726 点である。相模野第 IV 期後半に位置づけられる。第 III 文化層は B1 層下部、もしくは L2 層上面が生活面と推測された。ナイフ形石器 40 点、尖頭器 6 点、スクレイパー 14 点、彫器 4 点、二次加工痕のある剥片 15 点、使用痕のある剥片 12 点、剥片類 350 点、石核 50 点、敲石 6 点、摩石 1 点の合計 498 点である。相模野第 IV 期前半とされた。また B2 層において黒曜石製のナイフ形石器 1 点が出土している。以上のように本遺跡はナイフ形石器や尖頭器の変遷が層的に把握できる重層遺跡であり、貴重な発掘調査事例として評価できよう（麻生 1993、御堂島 2012）。

## 2. 資料の整理作業経過

筆者は本遺跡の第 I 文化層の石器群について、L1S 層以降の石器群の変遷を検討する中で、石核と報告され



第1図 下森鹿島遺跡の位置と旧石器時代調査区(赤丸)

た資料(原報告 41 図 106, 第 2 図 2)に注目しており(長澤 2024, 2025)、石器群を改めて検討する必要性を感じていた。そして当館に収蔵されている第 I 文化層出土石器を全点実見し、発掘調査および整理作業・報告書刊行の担当者である株式会社玉川文化財研究所上席研究員の麻生順司氏と意見交換を行い、追加報告が必要と考えられる石器 10 点を抽出した。本稿ではそれらの石器を報告する。

資料実見は令和 7 年 10～11 月、麻生順司氏との意見交換は 11 月に、令和 7 年 12 月～令和 8 年 1 月に実測・トレース・写真撮影を行った。なお、器種、石材は長澤による。

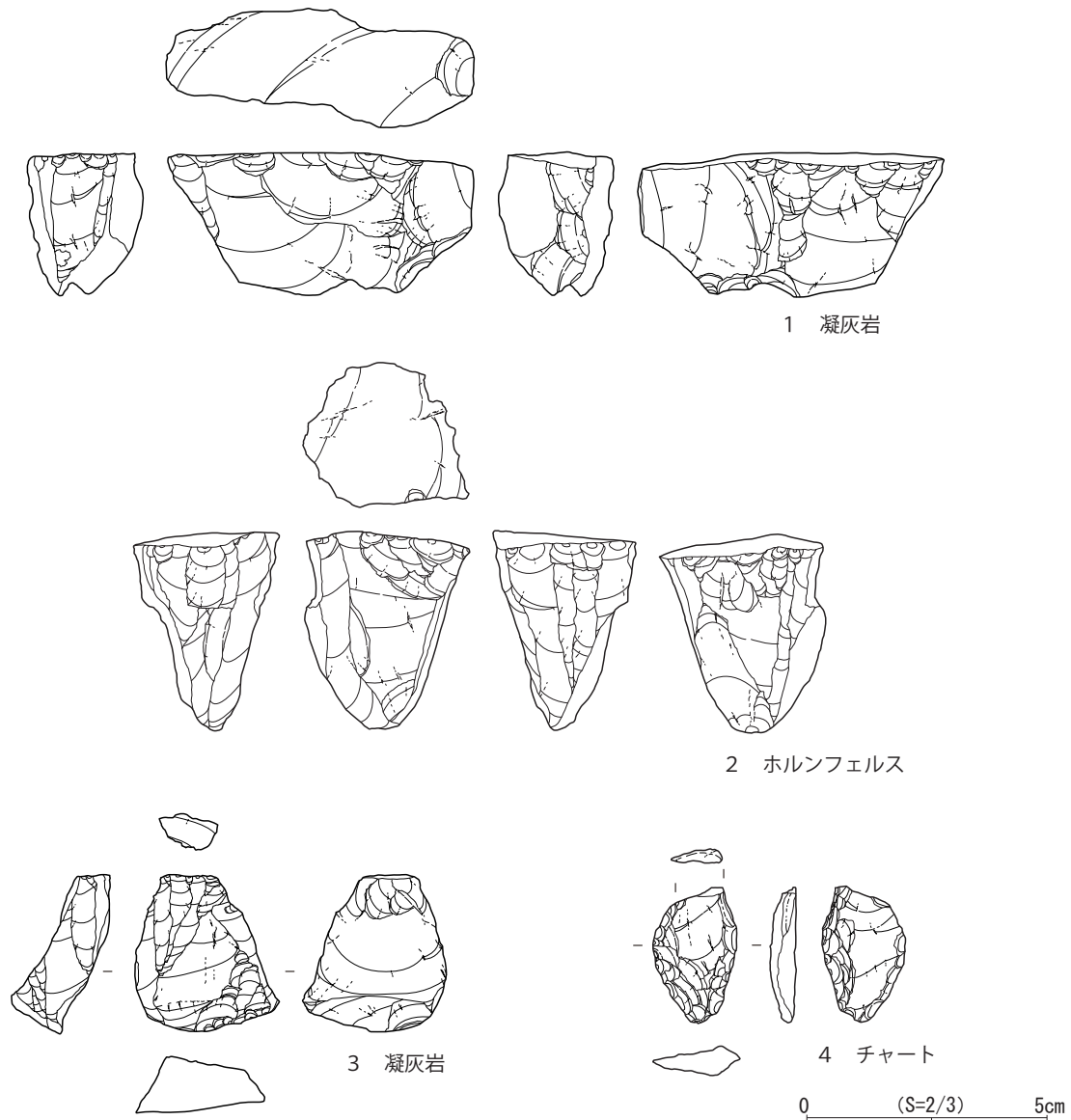
### 3. 石器の詳細

今回追加報告を行う資料は、細石刃核 2 点、細石刃核作業面調整剥片 1 点、尖頭器未製品 6 点、敲石 1 点である。

1 は細石刃核である。素材形状は不明。打面から下端へ向けて石核成形剥離が行われている。また下端から打面部への調整剥離も確認でき、打面部からのものより小規模である。打面調整は右側に一枚小規模な剥離面が認められるが、細石刃剥離面が位置する左側は未調

整である。正面・裏面の中央に部分的な高まりが残置しており、打面全体はやや歪んだ薄舟底状である。細石刃剥離面は左側縁にのみ 1 面認められるが、末端まで抜けきっていない。石材は黄白色を呈する凝灰岩であり、後世の剥離面は緑味が強いグレーである。全体的にやや風化している。17 号ユニット出土である。(注記: SK634 既存台帳器種: 石核)

2 は細石刃核である。既存報告では石核とされている。円錐形を呈しており、素材形状は不明である。両側縁に細石刃剥離面が確認でき、正面・裏面には石核成形とみられる上方からの剥離が残置している。打面は単剥離面打面である。右側面には 2 条の細石刃剥離面が確認でき、下端部から上への細長い剥離面に切られている。おそらくは作業面に生じたステップ除去あるいは稜線を整える意図があった可能性がある。左側面にも幅狭の剥離面があるが、細石刃剥離面とは判断しにくく、ステップとなっているものが確認できる。また裏面右側の狭長な剥離は細石刃剥離の作業面調整を意図した可能性がある。石材はホルンフェルスでやや風化している。19 号ユニットの出土である(注記: SK543 既存台帳器種: 石核)



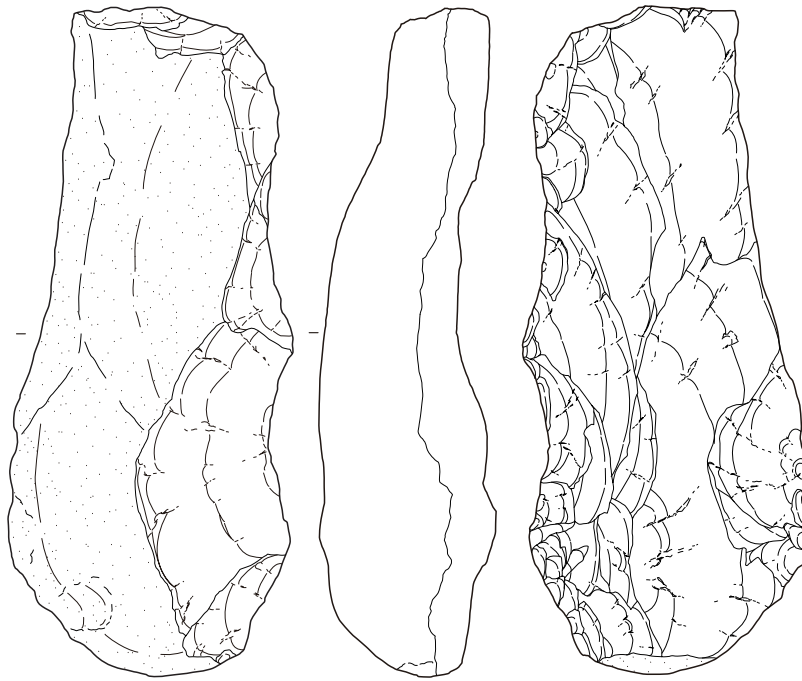
第2図 出土石器 (1)

3は細石刃核の作業面調整剥片である。打面部からの加撃と考えられ、正面から左側縁にかけて細石刃剥離面が残置している。正面上部には打面部からの加撃によりステップが生じ、正面下半では下方からの加撃によるステップが認められる。おそらくは上方からの加撃は細石刃剥離面の形成および剥離角の調整、下方からの大きな剥離面は初期の石核成形を意図した剥離の可能性がある。細石刃核の形状は判然としないが、打面および細石刃剥離面の状況から舟底状の細石刃核であった可能性があろう。石材は淡い緑色を呈する凝灰岩である。17号

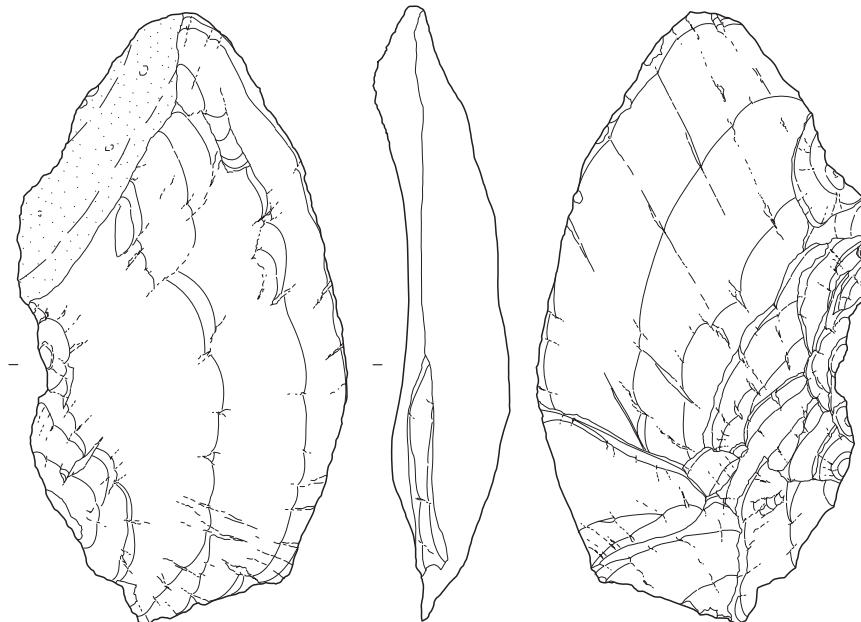
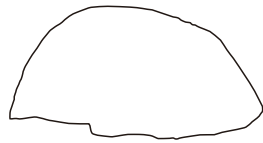
ユニット出土である。(注記:SK633、既存台帳器種:剥片)

4～9は尖頭器未製品である。4は既存報告では尖頭器と分類され、図版には掲載されていない。上半部を折損しており、残存部は木葉形に近い。右側面上方に平坦面が残る。調整加工は右側縁では正面から裏面へ、左側縁では裏面から正面へ行われているが、面的な剥離は多くなく、両面に大きな剥離面が残置している。9号ユニット出土である(注記:SK441、既存台帳器種:尖頭器)

5は既存報告では石核とされている(原報告第43図113)。素材は円礫を半割したもので、正面には大きく



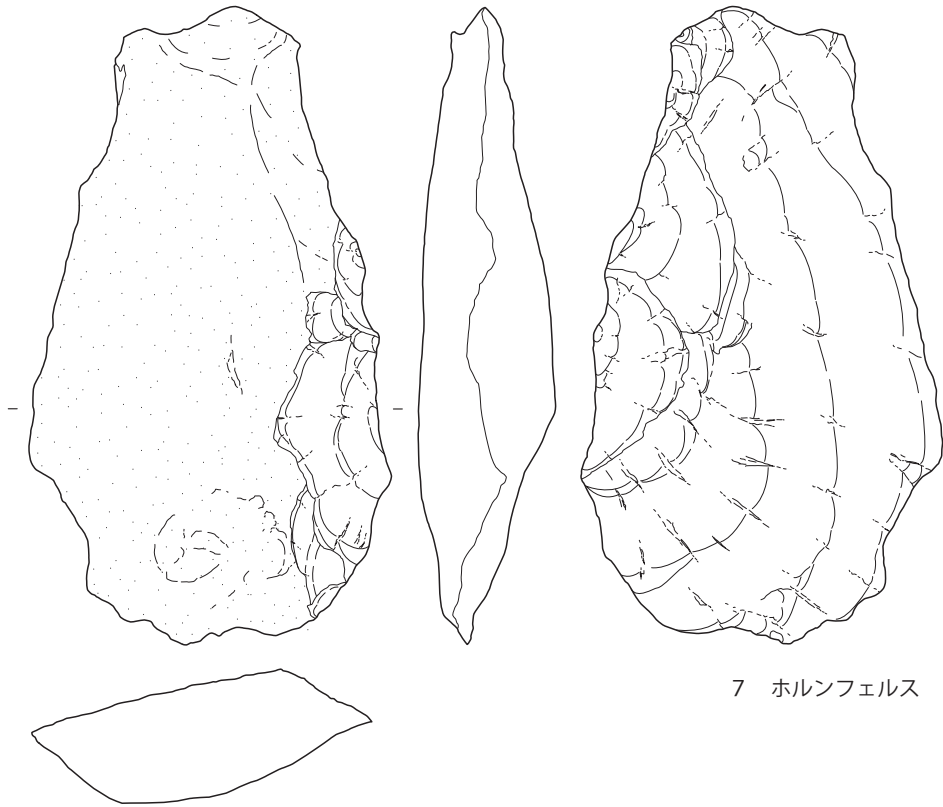
5 ホルンフェルス



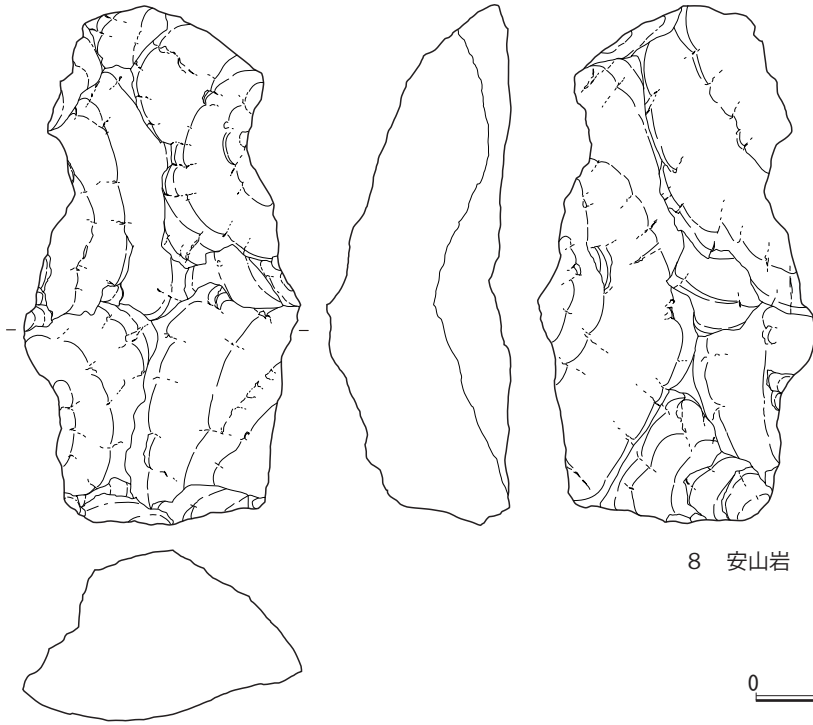
6 安山岩

0 (S-2/3) 5cm

第3図 出土石器 (2)



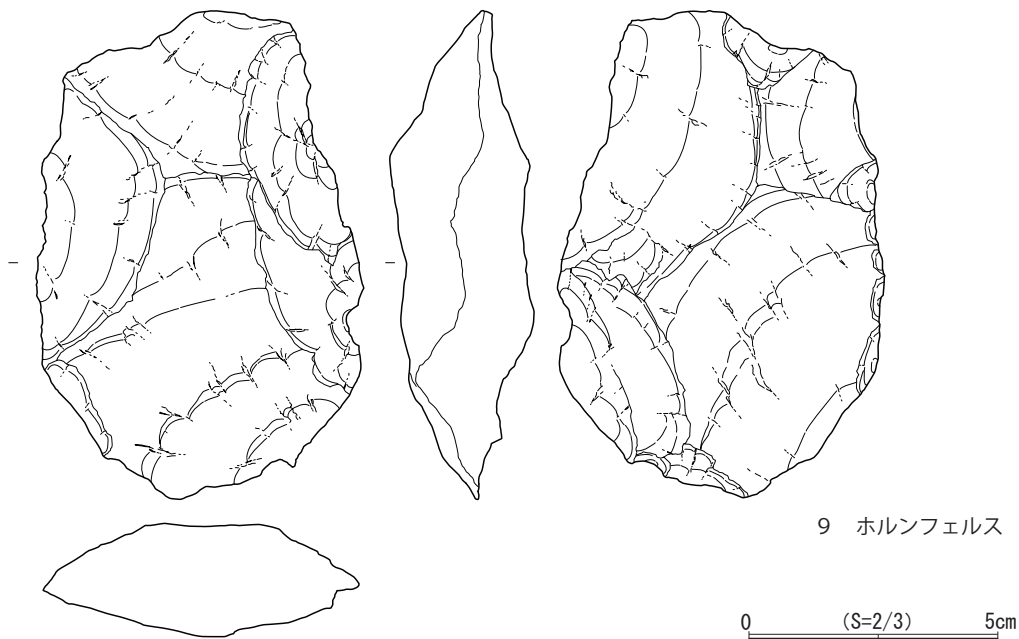
7 ホルンフェルス



8 安山岩

0 (S-2/3) 5cm

第4図 出土石器 (3)



9 ホルンフェルス

## 第5図 出土石器 (3)

礫面が残置している。また、裏面上部には素材面の可能性がある横長の剥離面が確認できる。主に正面の両側縁から加撃を行い、成形している。裏面下端部右下、同上部にはステップが確認できる。正面右側縁はある程度厚みが除去できているが、左側縁の上部は調整加工がなく、急角度に礫面が残る。また下端部の厚みがうまく除去できておらず、側面観がやや歪む。裏面のステップとともに成形が円滑にできずに作業を止めた、あるいは廃棄したものと考えられる。しかし、既存報告のように、石核としても評価できる点是否定できない。石材はホルンフェルスである。20号ユニット出土である。(注記：SK816、既存台帳器種：石核)

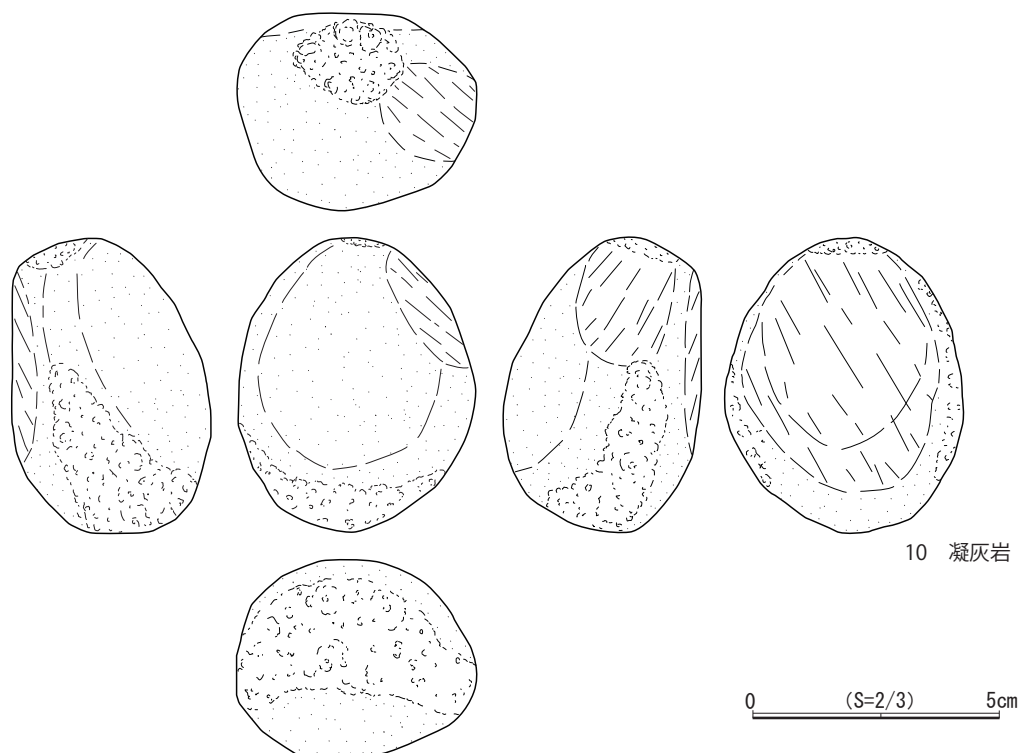
6は板状の素材を用いたもので、正面左上半部に礫面が残置している。素材は横長剥片であり、正面と裏面の剥離軸がおおよそ一致しており、作業面を固定した剥片獲得が推測される。正面下部および右側面下半部に折取面と考えられる剥離が残る。打点部の厚みを正面からの加撃により除去しようとしたが、強いステップが複数生じたため、廃棄されたと考えられる。石材は茶褐色の安山岩である。8号ユニット出土である。(注記：SK277、既存台帳器種：二次加工痕のある剥片)

7は横長剥片を素材としたもので、正面の大半は礫面であり比較的平坦である。右側縁を両面から加撃し、素材の打点部を除去している。正面にステップが2か所残るが、

それ以外は顕著なステップは確認できず、何らかの理由で作業を止めたことがうかがえる。正面下半部に直径1cm前後の斑状変結晶が見られる。石材はホルンフェルスである。11号ユニット出土である。(注記：SK1134、既存台帳器種：二次加工痕のある剥片)

8は既存報告では石核とされている(原報告第42図110)。素材形状は不明であるが、正面の高まりと裏面の平坦さから肉厚な素材剥片であった可能性がある、両側縁からの加撃により成形されるが、正面中央部には顕著なステップが確認でき、そのため廃棄されたと考えられる。裏面は平坦な剥離面が確認でき、中央部には部分的にステップがある。この平坦剥離は横長剥片獲得の可能性もあり、5と同様に石核の可能性も含んでいる。石材は安山岩であり、節理構造が顕著である。12号ユニット出土である。(注記：SK1271、既存台帳器種：石核)

9は素材形状が不明であり、両側縁からの加撃を正面・裏面に行っている。左側縁は比較的薄手であるが、右側縁下部に強いステップが確認でき、剥離が中央部付近まで達していない。そのため厚みが除去できず、肉厚な側縁となっている。側面観をみると上下は薄手だが中央部は肉厚であり、この状況から製作を断念した可能性がある。石材はホルンフェルスである。14号ユニット出土である。(注記：SK1202、既存台帳器種：不明)



第6図 出土石器 (4)

第1表 出土石器一覧表

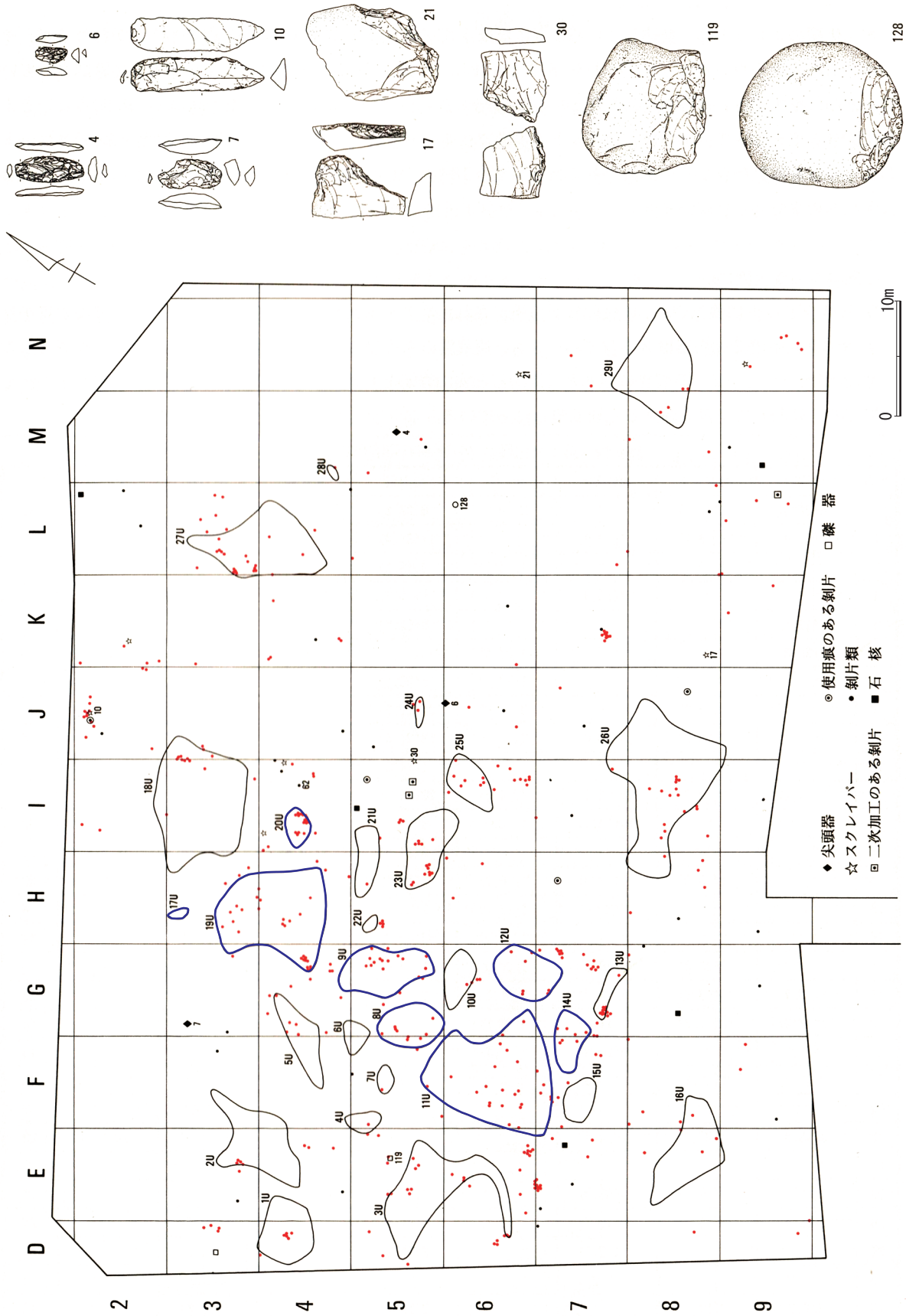
| 図面No. | 出土位置    | 器種          | 石材      | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 備考              |
|-------|---------|-------------|---------|--------|-------|--------|-------|-----------------|
| 1     | 17号ユニット | 細石刃核        | 凝灰岩     | 28.6   | 63.0  | 22.3   | 51.2  | 風化あり            |
| 2     | 19号ユニット | 細石刃核        | ホルンフェルス | 42.9   | 34.5  | 29.1   | 43.8  |                 |
| 3     | 17号ユニット | 細石刃核作業面調整剥片 | 凝灰岩     | 33.1   | 30.3  | 11.5   | 13.5  |                 |
| 4     | 9号ユニット  | 尖頭器未製品      | チャート    | (28.5) | 18.0  | 5.4    | 2.3   | 先端部欠損           |
| 5     | 20号ユニット | 尖頭器未製品      | ホルンフェルス | 131.5  | 55.4  | 34.4   | 259.2 |                 |
| 6     | 8号ユニット  | 尖頭器未製品      | 安山岩     | 121.5  | 65.1  | 19.4   | 150.2 |                 |
| 7     | 11号ユニット | 尖頭器未製品      | ホルンフェルス | 126.5  | 70.6  | 24.4   | 200.8 |                 |
| 8     | 12号ユニット | 尖頭器未製品      | 安山岩     | 103.2  | 55.5  | 35.3   | 146.2 |                 |
| 9     | 14号ユニット | 尖頭器未製品      | ホルンフェルス | 98.2   | 65.2  | 28.1   | 150.3 |                 |
| 10    | 8号ユニット  | 敲石          | 凝灰岩     | 58.5   | 47.8  | 38.2   | 158.5 | 右側縁、裏面に部分的に磨面あり |

10は敲石である。円摩度が高い円礫を用いたもので、上下および両側縁下部にかけて敲打痕が残る。上面および左側縁には敲打による平坦面が形成されている。いずれも敲打による顕著な剥離面は認められない。また正面右上部および裏面全体に弱い磨面が確認できる。石器製作の加撃時に素材の縁辺を擦る場合があり、それにより形成された磨面の可能性も考えられるが判然としない。石材はやや砂質の粗粒凝灰岩である。8号ユニット出土である。(注記：SK471、既存台帳器種：敲石)

#### 4. 各ユニットの出土状況と文化層

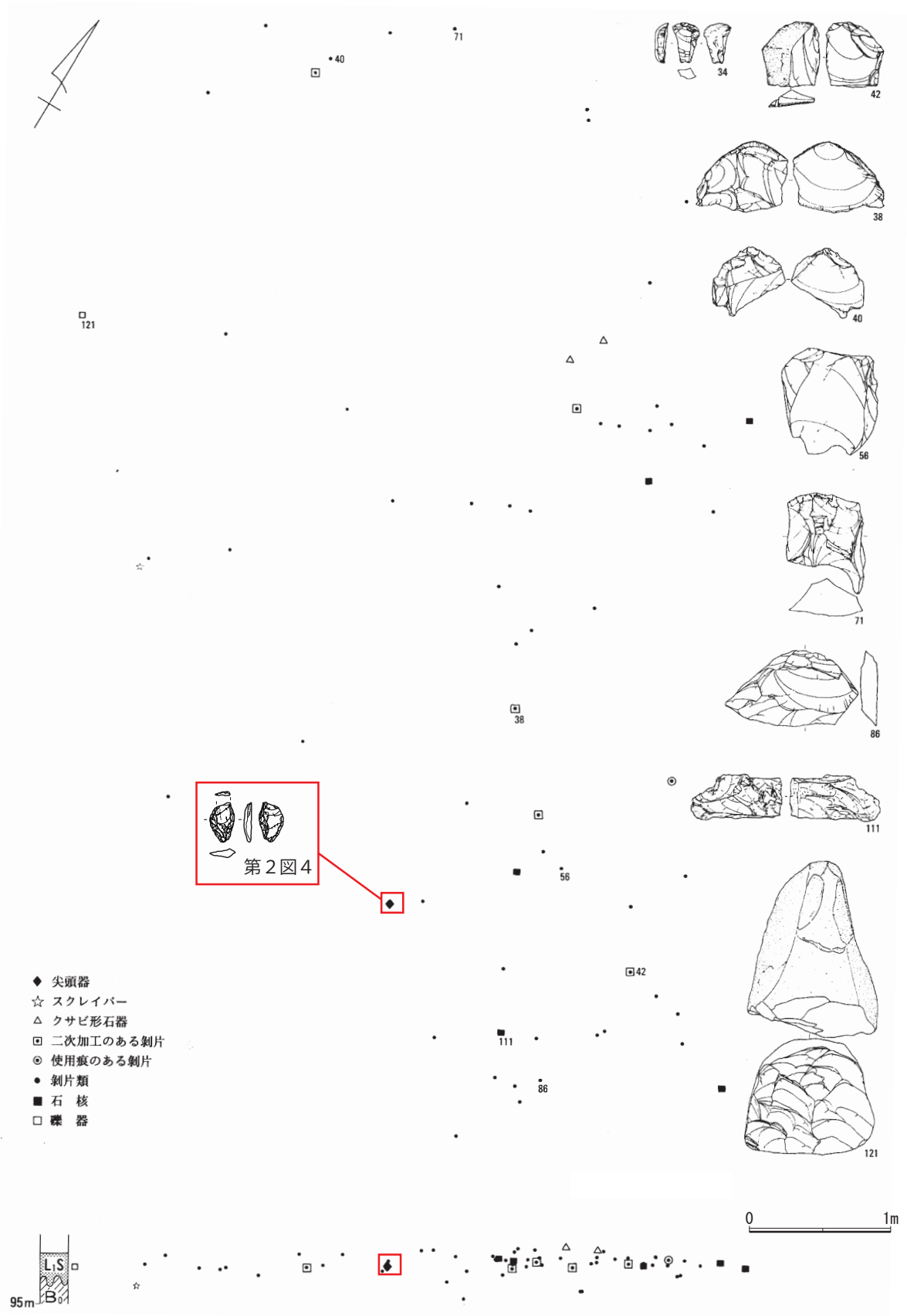
今回報告する石器10点はいずれも新規に実測を行っており、石器の展開が異なるもの、新規図化のものについて各分布図に明示した(第7～12図)。なお19号ユニット出土の細石刃核(第2図2)の出土位置は、既存報告(P38・39)を参照されたい。また器種変更に伴い、それぞれユニットの器種組成も変更となるため、第2表に変更後の器種組成を反映した一覧を示す。

8号ユニットでは二次加工痕のある剥片1点を尖頭器未製品へ変更し、報告書に掲載されなかった敲石を図化した(第3図6、第6図10)。11・12号ユニットでは

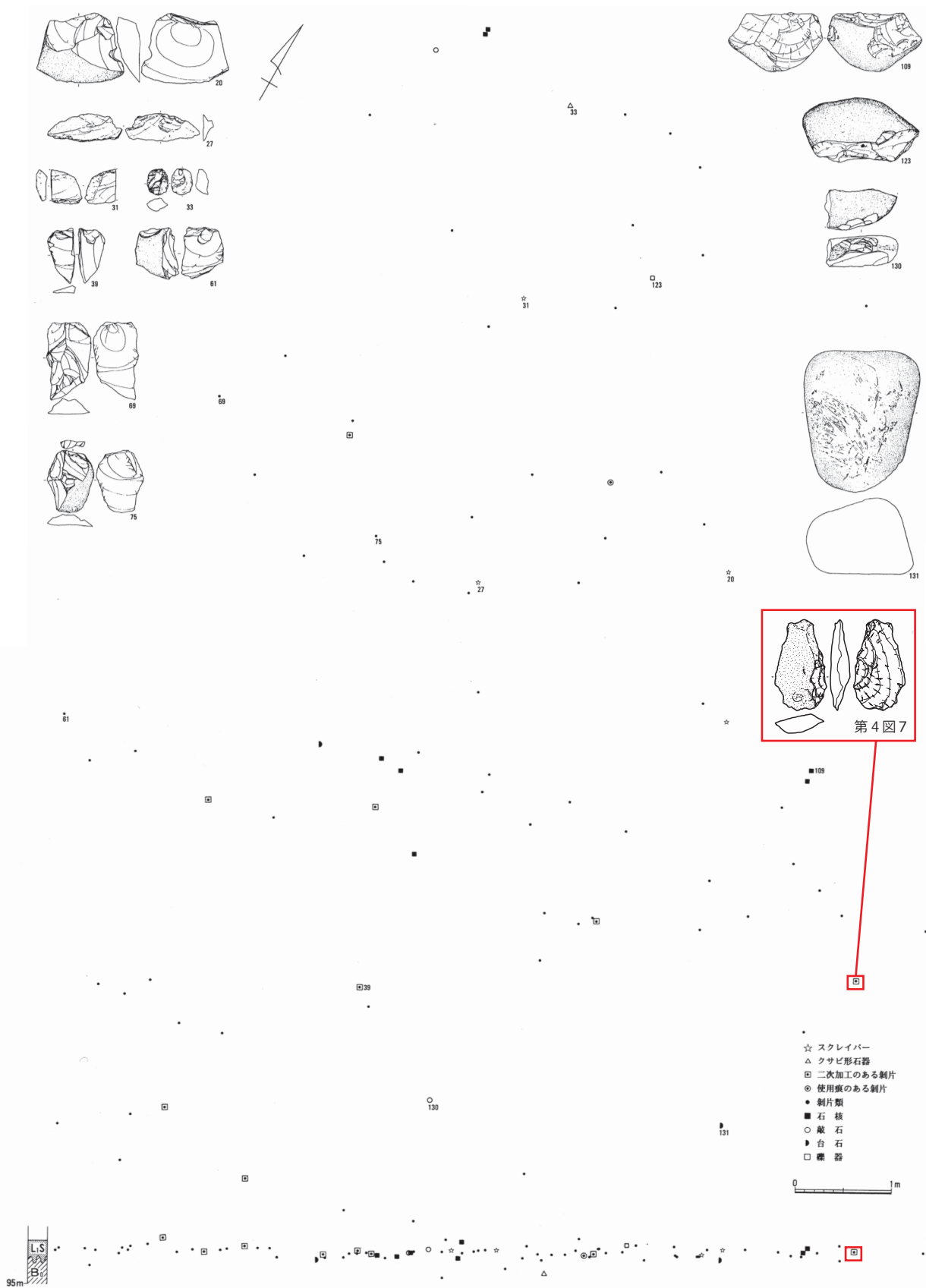


第7図 第Ⅰ文化層全体ユニット（青枠は今回の対象ユニット）

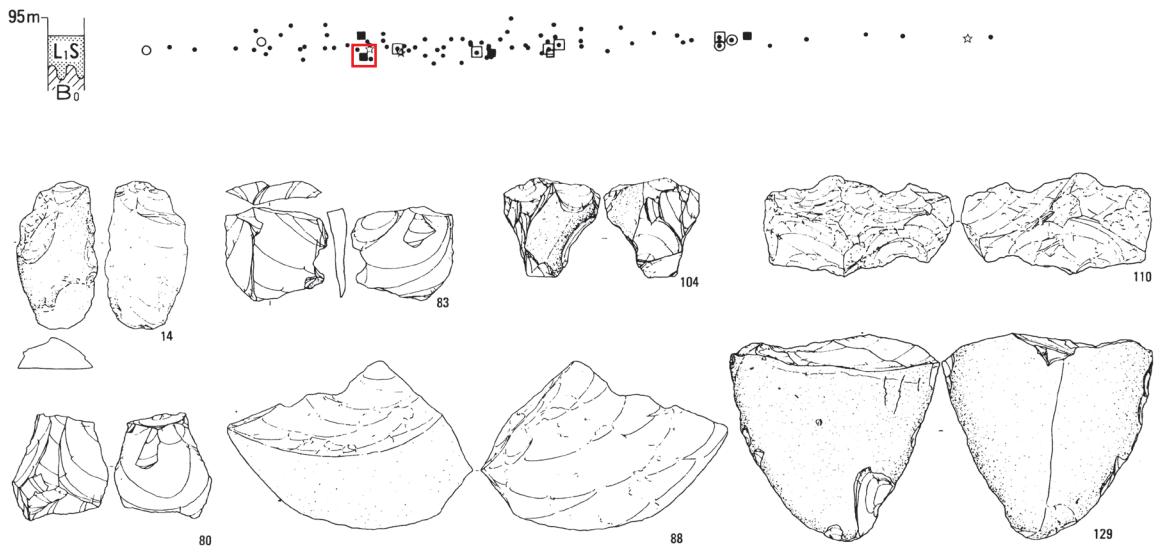




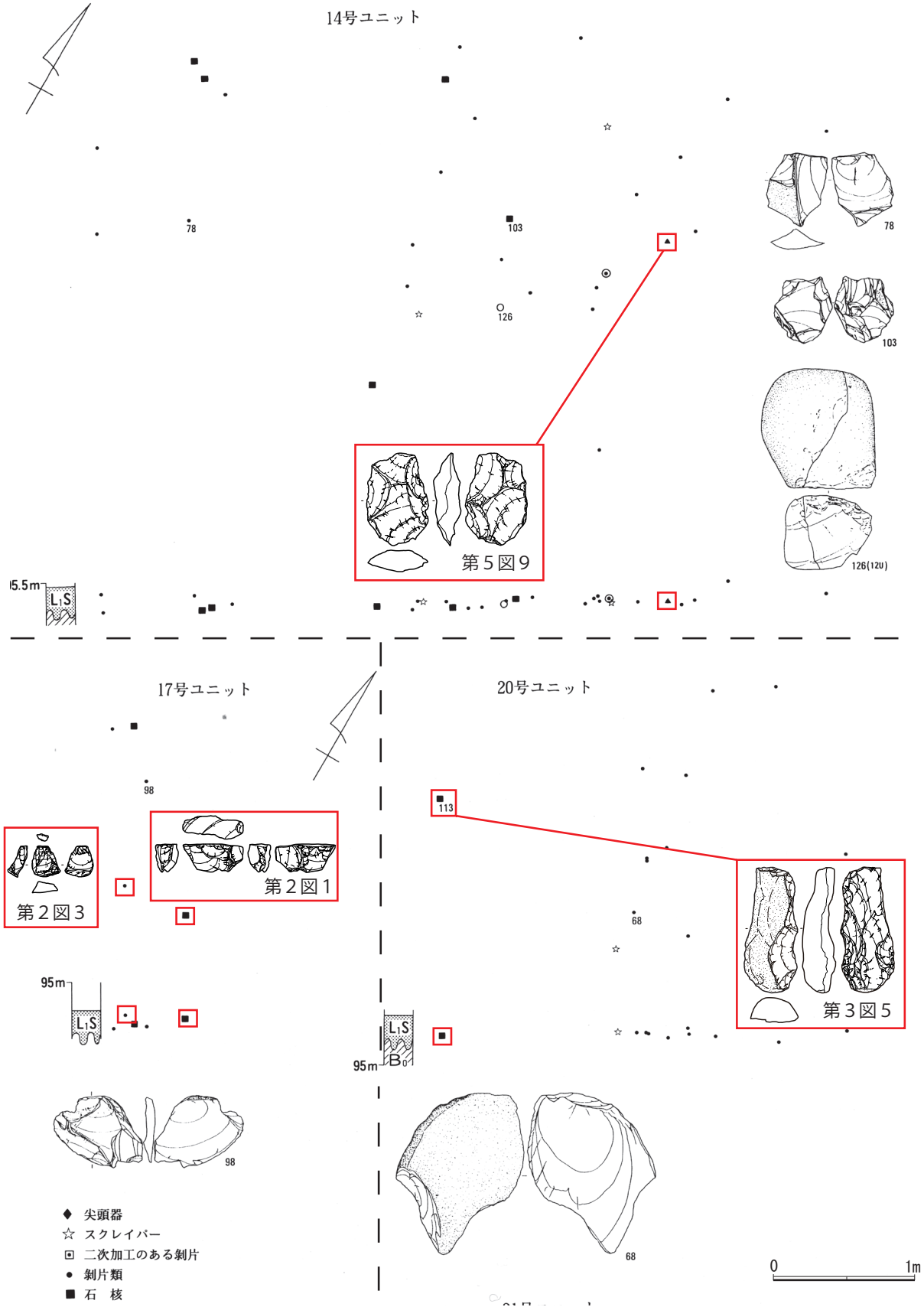
第9図 9号ユニット



第10図 11号ユニット



第11図 12号ユニット



第12図 14、17、20号ユニット

第2表 ユニット出土石器器種組成一覧 ※黄色：点数増加、水色：点数減少

| ユニット | 細石刃核 | 細石刃核<br>作業面調整剥片 | 尖頭器 | スクレイパー | クサビ形石器 | RF | UF | 剥片類 | 石核 | 礫器 | 敲石 | 台石 | 器種<br>不明 | 計   |
|------|------|-----------------|-----|--------|--------|----|----|-----|----|----|----|----|----------|-----|
| 1    |      |                 |     | 2      |        |    | 1  | 16  | 2  | 1  |    |    |          | 22  |
| 2    |      |                 | 2   | 2      |        | 3  | 1  | 25  | 2  |    |    |    |          | 35  |
| 3    |      |                 |     | 2      |        |    | 1  | 15  | 2  | 2  |    |    |          | 22  |
| 4    |      |                 |     |        |        |    |    | 12  | 1  |    |    |    |          | 13  |
| 5    |      |                 |     | 1      |        |    | 1  | 6   |    |    |    |    |          | 8   |
| 6    |      |                 |     |        |        |    | 1  | 4   |    | 1  | 1  |    |          | 7   |
| 7    |      |                 |     |        |        |    |    | 3   | 1  | 1  | 1  |    |          | 6   |
| 8    |      |                 | 1   |        |        | 2  | 3  | 64  | 4  |    | 1  |    |          | 75  |
| 9    |      |                 | 1   | 1      | 2      | 5  | 1  | 49  | 5  | 1  |    |    |          | 65  |
| 10   |      |                 |     |        |        | 1  |    | 4   | 2  |    |    |    |          | 7   |
| 11   |      |                 | 1   | 4      | 1      | 7  | 1  | 64  | 7  | 1  | 2  | 2  |          | 90  |
| 12   |      |                 | 1   | 4      |        | 5  | 2  | 75  | 3  | 1  | 1  |    |          | 92  |
| 13   |      |                 |     |        |        |    |    | 20  | 1  |    |    |    |          | 21  |
| 14   |      |                 | 1   | 2      |        |    | 1  | 20  | 5  |    | 1  |    |          | 30  |
| 15   |      |                 |     | 1      |        | 1  |    | 5   | 1  |    |    |    |          | 8   |
| 16   |      |                 |     | 2      |        | 1  |    | 8   | 1  | 1  |    | 1  |          | 14  |
| 17   | 1    | 1               |     |        |        |    |    | 2   | 1  |    |    |    |          | 5   |
| 18   |      |                 | 1   | 2      |        | 3  | 1  | 16  | 5  |    | 1  |    |          | 29  |
| 19   | 1    |                 |     | 1      | 1      | 7  | 1  | 26  | 5  | 2  | 2  |    |          | 46  |
| 20   |      |                 | 1   | 1      |        |    |    | 11  | 0  |    |    |    |          | 13  |
| 21   |      |                 | 1   | 2      |        | 1  |    | 6   | 2  |    |    |    |          | 12  |
| 22   |      |                 |     |        |        | 1  |    | 7   | 1  |    |    |    |          | 9   |
| 23   |      |                 |     | 3      | 1      | 3  | 2  | 13  |    |    |    |    |          | 22  |
| 24   |      |                 |     | 1      |        |    | 1  | 3   |    |    |    |    |          | 5   |
| 25   |      |                 |     | 1      |        |    | 2  | 8   |    |    |    |    |          | 11  |
| 26   |      |                 | 1   | 7      |        | 1  | 1  | 15  | 2  | 1  |    |    |          | 28  |
| 27   |      |                 |     | 1      |        | 1  | 1  | 5   | 3  |    |    |    |          | 11  |
| 28   |      |                 |     |        |        |    |    | 8   |    |    |    |    |          | 8   |
| 29   |      |                 |     | 1      |        | 2  |    | 8   | 1  |    |    |    |          | 12  |
| 外    |      |                 | 3   | 7      |        | 3  | 4  | 31  | 5  | 2  | 1  |    |          | 56  |
| 計    | 2    | 1               | 14  | 48     | 5      | 47 | 26 | 549 | 62 | 14 | 11 | 3  |          | 782 |

それぞれ二次加工痕のある剥片1点、石核1点を尖頭器未製品に変更した（第3図7、第4図8）。14号ユニットでは器種不明1点を尖頭器未製品とした。17号ユニットでは石核、剥片それぞれ1点を、細石刃核、細石刃核作業面調整剥片へ変更した（第2図1、3）。20号では石核1点を尖頭器未製品とした（第3図5）。

今回の資料報告の中で重要視される点は、細石刃生産にかかる資料が確認されたことである。17号ユニットでは、細石刃核と細石刃核の作業面調整剥片が確認され、どちらも凝灰岩であるが、石質の様子、特に風化の状況が顕著に異なる。少なくとも17号ユニットでは2個体による細石刃核による細石刃生産が想定される。また19号ユニットにおいても円錐形を呈するホルンフェル

ス製の細石刃核が確認された。細石刃剥離面の様子および調整剥離から残核として遺棄された可能性がある。今回の調査区全体におけるユニットでみるとやや近い集中部で出土している（第7図）。

尖頭器が組成に追加となるユニットは8、11、12、14、20号ユニットである。周辺部から出土した剥片類との石材検証および接合は実施していない。今回の報告により尖頭器は未製品とユニット外の単独出土を含めると14点を数える。具体的な尖頭器の様相は後述する。細石刃石器群と同ユニット内で共伴するものは確認できなかった。この点から第I文化層(a)尖頭器石器群、同(b)細石刃石器群として区分する。

それぞれの時間的な位置付けは相模野第V期（鈴木・

矢島 1978) に相当するものと考えられる。諏訪間順氏による段階編年(諏訪間 2001)では、細石刃石器群の利用石材が黒曜石ではなく凝灰岩・ホルンフェルスである点、出土層位が L1S 層である点を加味し、段階 X とする。一方で尖頭器石器群については、出土層位から段階 X~XI におよぶ可能性がある。段階 XI の要件として削片系細石刃核との共伴が挙げられているが(長堀北遺跡第 II 文化層(小池 1990・1991)、月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点第 I 文化層(相田・小池 1986)など)、本遺跡では両石器群が同一ユニットから出土していない。この点は、段階 XI の細石刃核の形状やその成形技術など、細かな属性を把握し、考察した上で評価する必要がある。

### 5. 下森鹿島遺跡第 I 文化層 (a) における尖頭器の様相

ここまで今回報告した石器の記載および出土位置の状況を述べ、文化層の整理を行った。以下では 14 点出土した尖頭器を対象に、第 I 文化層 (a) の尖頭器製作をまとめる。

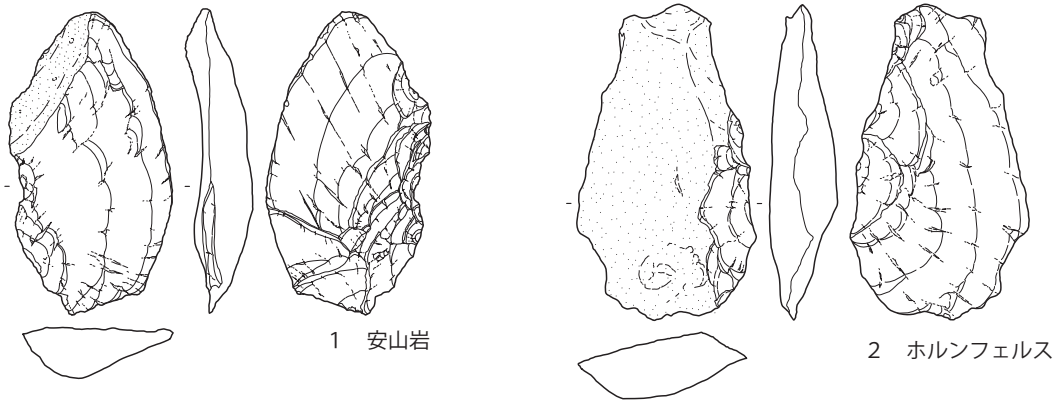
第 14 図は第 I 文化層 (a) の尖頭器を集成したものである。各成形状況および平面形や断面形から未製品と製品に大きく区分した。ただし尖頭器の破損状況から一部に判断に苦むものを含んでいる。石材別点数は、安山岩が未製品 3 点、製品 1 点、破損品 1 点、ホルンフェルスは未製品 3 点、製品なし、チャートは未製品 1 点、製品 3 点、頁岩は未製品はなく、製品 1 点である。なお同図の頁岩とした資料は、利根川水系のいわゆる黒色頁岩である可能性が考えられる。

未製品は素材面を多く残すものや、礫面などがほぼ除去されたものなど、前半と後半に区分できる可能性がある。おおよそ 12cm 程度のやや肉厚な板状剥片が安山岩・ホルンフェルスに認められる(第 13 図 1・2、以下番号のみとする)。またホルンフェルスには円礫を半割したもの(3)も確認できる。このことから尖頭器の素材は多様であったといえよう。板状のもの成形剥離をみると、打点部の厚みをはじめに除去している点が共通している点が指摘でき、片側連続や交互剥離などで面的な剥離を繰り返している(1・2)。一方、肉厚な素材ではこのはじめの段階で厚みが上手く除去ができなかったために、断面が肉厚な半円形や歪んだ平行四辺形や台形状となっている(3・7・8)。他のものよりも小形である 6 も、剥片素材であるが、調整加工が周辺で止まってしまう。歪んだ台形状を呈する。また 4 は小判状を呈するもので、面的な剥離で厚みを除去しているが、側面

形状を見ると、中央付近は厚みが減じ切れていない。チャートは比較的小ぶりなもので、安山岩・ホルンフェルスよりも点数が少なく、遺跡内に持ち込まれた時点で大きさに差異があったと推測される。1 点のみで周辺加工であり、ほかの未製品とは異なる。

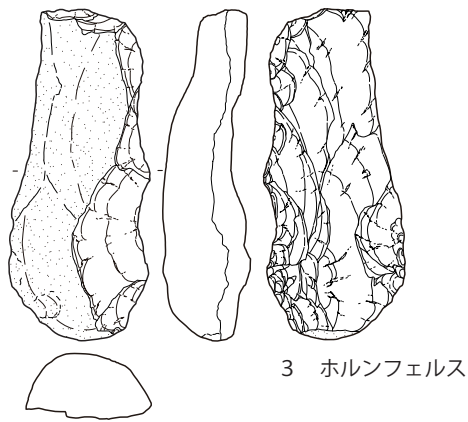
製品を概観すると完形品はなく、先端部、下端部、上半部などいずれも欠損している。石材別でみるとチャートが多く 3 点を数える。片面加工で肉厚なもの、素材をのこす周辺加工のもの、両面加工のものなど、それぞれ加工が異なる。特に周辺加工のものは L1S 層段階では主体的ではない。11 は裏面に素材面を残すが、薄手に仕上げられている。また頁岩のものは(12)は上半部が欠損しており、全体の形状は明らかではないが、おそらく最大幅は中央部にあったものと考えられる。器体中央部まで及ぶ剥離が施されている。安山岩については、断面が扁平で整った木葉形が出土している(13)。下半部が左側縁からの加撃により折損している。調整剥離を観察すると裏面に器体中央部を超える剥離が 2 面確認でき、厚みの除去が行われている。表面も中央まで及ぶ剥離が複数見られ、素材面は完全に除去されていると考えられる。また、先端部の破損品がある(14)。右側縁からの加撃により折損しており、製作時の過剰な加撃が想定される。先端部の平面形態が先鋭であり、少なくとも製作の初期段階ではなく、後半段階だろう。上記安山岩 2 点は比較的薄手に仕上げられており、注目される。

以上、第 I 文化層 (a) の尖頭器を検討した。石材では細石刃石器群で利用される凝灰岩製はなく、ホルンフェルス製が共通して認められる。また素材と完成品の状況からは、安山岩・ホルンフェルス・チャートが主石材であることが指摘できる。L1S 層では尖頭器が卓越することが先行研究にて指摘されており(白石 1989、2001 ほか)、今回の検討でも追認できた。安山岩の産地は県西部の箱根や白銀山・明神岳からの各河川など、ホルンフェルスは相模川水系と推定されており(柴田 1996)、それぞれの石材をどのように尖頭器として仕上げていたのか考えるうえで重要である。特に安山岩、ホルンフェルスについて、長堀北遺跡第 II 文化層、月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点第 II 文化層では削片系細石刃核に、寺尾遺跡第 I 文化層(白石 1989)などではホルンフェルスが打製石斧に利用されており、土器出現期における尖頭器を含めた両面加工技術と石材の関係を検討するうえで大変興味深い。

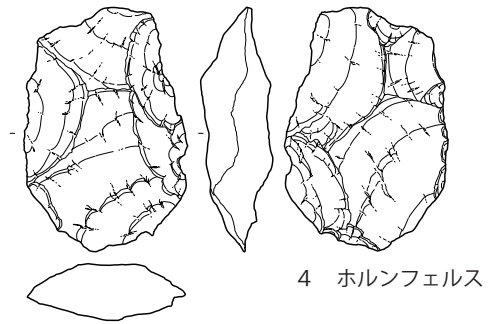


1 安山岩

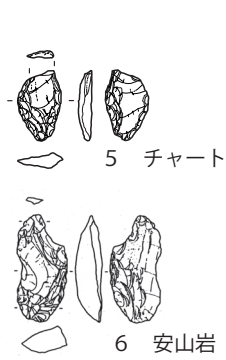
2 ホルンフェルス



3 ホルンフェルス

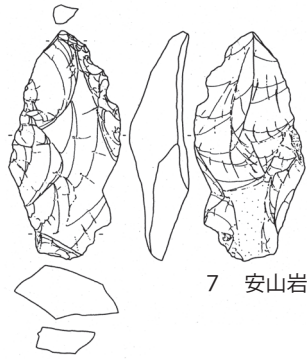


4 ホルンフェルス

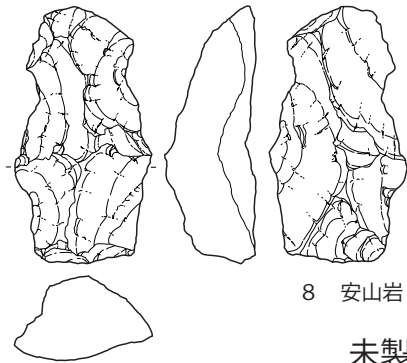


5 チャート

6 安山岩

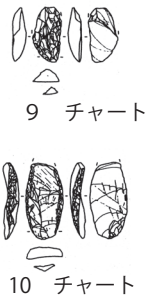


7 安山岩



8 安山岩

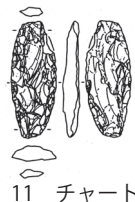
未製品



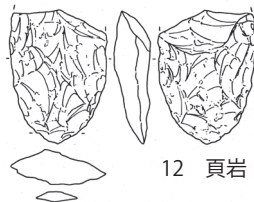
9 チャート



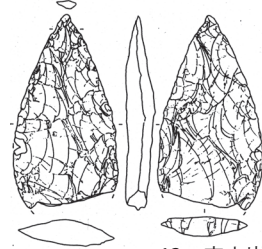
10 チャート



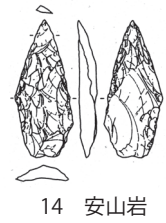
11 チャート



12 頁岩



13 安山岩



14 安山岩

製品

0 (S=1/3) 10cm

第13図 第I文化層(a)出土尖頭器

## おわりに

本稿では下森鹿島遺跡第Ⅰ文化層について、資料報告を行い、各石器の記載および出土位置を報告した。そして第Ⅰ文化層(a)の尖頭器製作の様相をまとめた。

当館には境川・相模川の旧石器時代遺跡が多く収蔵され、特に下森鹿島遺跡は、橋本遺跡、中村遺跡、下九沢山谷遺跡などと同様に重層遺跡であり、研究史の中でも重要な遺跡である。既存報告の内容を丹念に把握し、追加資料から新たな情報を提示することが遺跡の価値をさらに高め、地域研究や石器研究の前進に寄与するものと考えている。今後も1点の石器を起点とし、遺跡の理解を深める。多くの方からのご批判を切に願う。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、株式会社玉川文化財研究所 所長研究員の麻生順司氏には貴重なお時間を割いていただき、報告書作成時に掲載されなかった資料を筆者とともに実見し、器種認定や文化層の考え方など、多くの有益なご助言をいただきました。また、白石浩之先生には、草稿段階にご一読いただき、貴重なご意見を頂戴しました。心より感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 相田 薫・小池 聡 1986「第6章 旧石器・縄文時代の調査 第1節 第Ⅱ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』90-178頁 大和市文化財調査報告書 第21集 大和市教育委員会
- 麻生順司 1993「第三章 先土器時代 第1節 第Ⅰ文化層」『下森鹿島遺跡発掘調査報告書(先土器時代)』12-74頁 下森鹿島遺跡発掘調査団
- 麻生順司・相原俊夫 2021『山王平遺跡発掘調査報告書—旧石器時代編—』玉川文化財研究所
- 河合英夫・坪田弘子ほか 2020『下森鹿島遺跡群 A・B・C地区の調査』下森鹿島遺跡群調査団
- 河本雅人・川本真由美ほか 2005『古淵B遺跡旧石器時代資料再整理調査報告書』相模原市立博物館考古資料調査報告書
- 金山喜昭・土井永好ほか 1984『橋本遺跡 先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会
- 小池 聡 1990『長堀北遺跡—資料編—』11-46頁 大和市文化財調査報告 第39集 大和市教育委員会
- 小池 聡 1991「第5章 旧石器時代・縄文時代草創期の調査 第1節 第Ⅰ文化層、第2節 第Ⅱ

- 文化層」『長堀北遺跡—本文編—』17-24頁 大和市文化財調査報告 第39集 大和市教育委員会
- 小出義治・伊藤恒彦ほか 1987『中村遺跡—都市計画道路町田南大野線埋蔵文化財発掘調査報告書—』中村遺跡調査団
- 柴田 徹 1996「大和市を中心とした相模野台地における旧石器時代の使用石材について」『大和市史研究』22 1-31頁 大和市役所総務部情報資料室編 大和市
- 白石浩之 1980「第Ⅴ章 発見遺構と出土遺物 第2節 第Ⅰ文化層」『寺尾遺跡』10-88頁 神奈川県埋蔵文化財調査報告 18 神奈川県教育委員会
- 白石浩之 1989「Ⅳ 石槍文化の様相 3 石槍の衰退と弓矢の出現」『旧石器時代の石槍』85-89頁 UP考古学選書7 東京大学出版会
- 白石浩之 2001「第Ⅴ章 旧石器時代最終末期から縄文時代初頭期 第1節 木葉形尖頭器と舌尖頭器の研究1「神子柴・長者久保系石器群の様相」」『石槍の研究』221-246頁 ミュゼ
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ(1)』44-169頁 有斐閣
- 諏訪問順 2002「相模野旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』72-6 636-643頁 岩波書店
- 関塚英一・松井泉ほか 1990『古淵B遺跡—都市計画道路古淵麻溝台線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』相模原市古淵B遺跡発掘調査団
- 長澤有史 2024「縄文時代初頭の石器群について—相模野台地を中心に—」『考古学フォーラム』26 7-30頁 考古学フォーラム
- 長澤有史 2025「相模野台地における狩猟具の様相—L1S層出土石器群を中心とした予察—」『石器文化研究』22 109-114頁 石器文化研究会 <https://sekki.jp/wp-content/uploads/2025/09/b4703683cbf795d4a71fcf53873fb291-1.pdf>
- 町田 洋 2009「第4章 相模川がつくった段丘の地形と地質 第2節 関東ローム層:その形成年代と環境」『相模原市史 自然編』94-106頁 相模原市
- 御堂島 正 2012「下森鹿島遺跡」『相模原市史 考古編』144-150頁 相模原市

## 挿図出典

- 第1図: 河合・坪田ほか 2020より引用、一部加筆  
第2~6図: 長澤作成  
第7~13図: 麻生ほか 1993より引用、一部加筆  
第14図: 麻生 1993より引用、一部加筆、長澤作成

